

哲學研究

第二百十六號

第十九卷
第三號

アナロギア思想の位置

山内得立

アナロギアは現今「類推」と譯せられて論理、または認識論の上では極めて論據の薄弱なる、時としては單に推斷以上に出得ない思想の運びとしてとりあつかはれてゐる。例へば比較心理學に於て動物の心理が研究せらるゝとき、我々がたゞ我々の心理からおし測つて動物の心的状態を臆斷しようとする場合、類推法によるといはれるのが常である。しかし古代及び中世に於てはこの語はかくの如き意味にのみ用ひられてゐなかつた。反對にそれがこれらの時代に於てもつてゐた意味の重要性は決して軽く評價せらるゝことを許さぬものがあるやうである。この語のもつ思想内容が、就中プラトン並びにアリストテレスに於て如何なる位置を占めてゐたか

を問題史的に取扱ふことが、こゝに企てらるべき一つの試論に屬するのである。

一

人間の思想の發展は學問的意味に於ては主としてロゴスのなるものとして規定し得らるゝであらう。ロゴスは勿論人間の存在に於て唯一なる性格を形づくつてゐない、バトスのなるものがより多くその主體的存在を規定するとも考へられるが、しかしバトスが主として發動する領域は藝術または宗教に於ていあつた。ロゴスを廣き、そして根源的なる意味に於て殆ど學問的なるものと同視しようとする我にとつては種々なる學的思想の發展をロゴスのなるものの表現として理解することも許さるべきであらう。バトスもバトロギーとして取扱はるゝ以上は既にロゴスのなる規定を免れ得ぬといはねばならぬ。凡てをロゴスのなるものによつて理解しようとすることはそれ故に直ちに客體的または對象的として特徴づけらるべきでなく、根源的なる意味に於て學問的なるものの一般的規定をあらはしてゐるといはねばならない。

さてロゴスのかくの如き發展について我々は次の三つの徑路を區別することができると思ふ。一、ロゴスはそれ自ら一つの秩序を表すが、單純なる秩序から複雑な

る秩序へ、一つのロゴスから二つのロゴスへ、二つのロゴスから多くのロゴスへ發展する。logos—dialogos—sunlogos が即ちこの路である。さうして dialogos が dialectus であり、sunlogos が即ち syllogism であるとするならばこの徑路が、ソクラテスの定義的ロゴスに初まり、プラトンの辨證法をへてアリストテレスの論理學に發展したところの思想體系であることも容易に察知し得らるゝであらう。ロゴスといふ言葉が、單に語としてゝはなく思想として一定の意義をもつたのは恐らくヘラクレイトスの哲學に於てゝあつたであらうが、秩序の論理として學問の世界に確固たる位置を占むるやうになつたのはソクラテスによつてゝあることも周知のことながらに屬する。さうしてプラトン、アリストテレスが各々の立場からしてこのロゴスの思想的意義を展開した人々であるとするならば、この第一の徑路は固有なる意味に於て哲學的なるロゴスの體系であるともいひ得るであらう。第二はアナログスである。さうしてそれが何を意味するかはさらにこれに加へて第三のカタログス(katalogos)をあげることによつて豫め輪廓づけることができるのである。カタログスは今日圖書館の一隅に見出さるゝものにはすぎないが、そのオリジナルな意味に於てはカタ、ログスであり、ロゴスの katētic 的な性格を表すものに外ならなかつた。それは時間

の順序に従つて上から下に降つてゆく秩序をあらはすところからして殊に歴史的なるもののロゴスに屬してゐる。プラトンもアンピトロンの息ヘラクレースからして二十五代の後裔を數へるとき、カタロゴスの「⁽¹⁾といふ語を用ひてゐる。歴史は事實を時間的繼起の秩序に従つて把握するものであるとするならば、カタロゴスがかくの如き學問の論理に屬してゐることも明かであるであらう。さうしてギリシヤに於てこのロゴスの意義を展開した人々はヘロドトス、ツキディデス、ポリビオス等の歴史家達であつたことも大凡誤なく言ひ得ることであると思ふ。

カタロゴスが歴史の立場であるに對し、アナロゴスは數學、自然科學のロゴスであることを我々はこゝに指摘しなければならぬ。アナロゴスが語源的に何から來たものであるかは別問題として、⁽²⁾anaがkataに對してロゴスの意味を性格づけてゐることは明であるといはねばならない。さうして後者が上から下へ、先なるものから後なるものへの順序を表すに對して、アナが反對に下から上へ、派生的なるものから原理的なるものへの秩序を意味してゐることもこの場合牢記せらるべきであらう。アナキシマン드로スに於てはこの順序の區別が運動の原理として常に對立せしめられてゐた。クセノポンに於てもこの理由からして彼の著書をAnabasisと名づ

けしめたのであらう。それは、しかし就中數學的なるもののロゴスに屬してゐる。ロゴスは既にそれ自ら *μέτρον* を、即ち「比」を意味してゐるが、殊にアナロゴスに於ては數的なるものが比例の形をとつてあらはれる。アナロゴスとは詳しくいへば *ἀντιλόγος* *ἀντιλόγος* であり二つの異れるものが互に異れるものでありながら同一のロゴスによつて支配せられてゐることをあらはしてゐる。即ち異れる雜多の中に統一的な關係を求め、これを意味してゐる。幾何學的にいへば二つの項が互に一定の距離に於てあり、これらがさらに第三の項によつて一定の空間的關係に置かれてゐることをそれは意味してゐるのである。それらは單なる比でなく複雑なる比例であり、一つのロゴスではなく、アナロゴスでなければならぬ、ロゴスがアナロゴスに發展することによつて、多の中に一を求むるところの數學的基礎概念が明かにせらるゝであらうことは見易き道理であらう。さうしてギリシヤに於てロゴスのこの方面の開拓に従事した人々として我々はテオドロス、エウドクソス、エウクリッド等の名をあげることができるのである。

アナロギアの數學的思想を展開する前にこの語がひろく日常的に如何なる意味に用ひられてゐたかを少しく檢して見よう。ロゴスは一般に、意味的なるもの、概念

的なるものを表はす點からしてアナロギアも「意味表示に従つて」または「一般概念上から」等々として用ひられた。またロゴスが秩序的なるものを意味する點からしてアナロギアは規則的なる、又は規範に従つて (*κατά μέτρον ἢ κανόνα*) 等の意味をもつてゐたやうである。^(三) アポロニオス (Apollonios Dyskolos) は *σοφία* に一般的に *aequabilitas Legis* 即ち「法律適用の公平性」といふ意味に之を用ひてゐたと傳へられてゐる。アレキサンドリアの學者達はアナロギアをストア學派の *ἀνομαλία* (不規則的なるもの) に對して常に用ひてゐたといふ。此等の點からしてアナロギアが一般に法則なき、無秩序なる、正理の缺けたるものに對して、順序正しき、公正なる合理的世界を意味してゐたことが明かであるであらう。それが數學的嚴密さに於ては、はななくとも、何らかの秩序に於て正しく位置づけられたる關係を表はしてゐたことも大凡これらの用方からして察知し得らるゝのである。^(四)

中世に於てもこの思想が種々なる方面に用ひられてゐたことを我々は知ることが出来る。キケロは之を *comparatio* 又は *proportio* として^(五) アルベルトス、マグヌス及びトーマスはさらに *convenientia proportionis* として神と人との關係をあらはすために用ひた。^(六) 就中ドンス、スコイツスに於ては一と多との關係を、一にして同時に多なるも

の存在をあらはす原理としてこの思想が多く用ひられてゐる。例へば原因と理由とは領域的に全く異つたものに屬するが、共に原理的なるものを表す點に於て一致してゐる。一なる神は多なる被造物と全く異りながら同時に相通ずるところの或ものを藏してゐなければならぬ。多の中に一を、異の内に同を認めながら此等を互に混同しないところにスコッソスの *genus metaphysicum* があつた。さうしてこの形而上學的類點をとくところのものが彼にとつてもアナロギアの論理に外ならなかつたのである。^(七)

しかしながらこれらの用法を古代、中世に互つて詳細に檢出することは我々の今の課題ではなく、むしろ此等の事實を背景としてこの思想が主としてギリシヤ哲學に於て如何なる位置を占めてゐたかを明かにすることが我々の問題でなければならぬ。殊にアナロギスが一般的なるロゴスの發展の上に占むる位置からしてそれが就中第一の思想徑路、即ちデイアロゴス及びシユンロゴスに對して如何なる關係を有するか、我々にとつて最も中心的なる問題であるといはねばならない。

(一) Platon: Theaetetus 175.

(二) *analogia* は即ち *analogia* であつてロゴスをもたぬ状態 *analogia* の打消してあり、ロゴスからすれば二重の否定を通じて再びロゴスに歸つた状態であるといはれるが、それは恐らくこぢつけにすぎぬであらう。ana は kata に對して用ひられた

ものと見るのが至當であると思ふ。

(三) Hesychios Alex. "Αναλογίαν = κατά ἀναλογίαν, κατά μέτρον ἢ χρῆμα.

(四) Πλάτωνος Πρωτοκράτης E. Hülster : Zur Theorie der Analogie und des sogenannten Analogieschlusses 1927 參照。

(五) Cicero : Quint I. VI. 3.

(六) Thomas : Summ. th. I. quest. XIII. 5.

(七) Heidegger : Die Kategorien und Bedeutungslehre des Duns Scotus, 1916.

二

ヨージェルが正しく指摘したやうに、凡ゆる眞の哲學は各々の基礎體驗をもつてゐるが、ピュタゴラス學派にとつてそれは世界を價值結合として、または完了的秩序として把握しようとする「調和の魅力」であつたといふことができる。^(一)但し哲學的基礎體驗としてそれは殊更にピュタゴラス學派的であつたとは考へられない。それをピュタゴラス的として特徴づけるところのものはこの基礎體驗を「數」として明確なる表式にまでもち來した點にあつた。體驗として感せられたる世界調和が、その表現形式として一種の世界數學を作りあげた、さうしてそこに於て數は互に關聯なき併存的なるものの、冷たき指標として、ははなく、凡ゆる方向に展開し、此等の各々と一定の關係に於て結合し、さうしてそこに生きたる價值結合と完了せる秩序とを作り

上げるところのデユナミスとして働いたのである。我々がピユタゴラス學派に於てロゴスの一つの展開を、殊にそのアナロゴス的な發展の第一の階段を見ようとするのも此の理由からしてある。しかしピユタゴラス學派にはそのかなりに長き傳統からして、または複雑なる學派の色彩からして注意深く區別せらるべき二つの思想が流れてゐたやうである。一はピユタゴラス自身のそれとして傳へらるゝところの、存在と數とを同一視する思想であり、それによれば凡てが數であり、凡ゆる存在は數から成立つてをり、數が即ち事物の本質であるに外ならなかつた。さうして數のエレメントを凡ゆる事物のエレメントとして、全てが調和と數との世界として主張せらるるに到つた。普通にピユタゴラスの學說として傳へられるところの、以上の思想はしかしながら之と關聯しながら稍異つた一つの他の思想によつて修正せられねばならなかつた。例へばピロラオスに於ては數は事物そのものであるよりも、事物をそれによつて我々に認識せむしるところの或ものとして考へらるゝに到つた。斷片四にも、實際に於て人が認識することのできる凡てのものは數をもつてゐる、何となれば人はこのものなしには認識することも知識することもできないであらうから、といつてゐる。ピロラオスにとつては凡ての事物がではなく、認識

し得べきものの凡てが數をもつてゐる、何物も數なしには認識し得られない、事物が單に存在としてでなく、我々に認識し得べきものとして存在するのはそれが數の存在様式をモデルとしてもつてゐるからである。さうして數の存在様式とは常に對立的なる二つのもの、例へば無限と有限、奇數と偶數等の如きものであつた。凡ゆる事物は數のこの對立的なる様式を模倣することによつて我々に知られ得べきものとなるのである。ピユタゴラス學派はこの思想からして十個の對要素 (*quorokhia*) を設定したことも周知のことながらに屬するであらう。數がその本性上凡ての人に對して、または凡ゆる事物にとつて知識を與へるもの (*gnoumici*) であり、指導的なるもの (*sympnouci*) であり教示的なるもの (*didactici*) であり得るのもこの理由からしてである。何となれば若しも數がなければ、或は數の存在なしには、事物の何ものもそれ自らにとつて、または他との關係に於て明瞭とはならぬであらうからである。數が凡ての事物を精神の中に於て感覺と調和せしめ、それをグノーモンの性質に従つて知らしめ、語らしめる。さうして數が事物の各々を有限と無限との關係に分ち、凡ての事物に物體性を附與するのである(斷片十一參照)。グノーモン (*Gnomon*) とは幾何學的に聲折形を意味するが一般に數學的には或數の自乗に加つてさらに自乘的なる

ものを作り出すところの數を、例へば $\aleph + \aleph = \aleph$ に於けるもの數を意味するのである。それはそれによつて一般に自乘的なる數の關係を我々に理解せしむるものとして役立つであらう。さらに廣くいへば我々にとつて外なるものを、精神にとつて物的なるものを、我々に理會せしめるところのものが我々にとつてグノーモンとなるのである。それはその言葉の意味からしても不可知者を可知的ならしむるものでなければならぬ。素數は自乘數に對してグノーモンであるが、さらに一般に數は事物に對して我々にとつてのグノーモンとなるのである。しかし數にこの仲介的性質をもたらずものは何であるであらうか。我々は何故に數をもつことによつて事物を知ることができるのであるか。凡てこれらの間は數の存在様式そのものからして答へられるより外はないであらう。數は有限であるか無限であるかの孰れかである。此の二つの區別をまたは對立をもつことは數に於て本質的であつた。しかるに「自然は世界秩序に於て無限的なるものと有限的なるものとからして成立つてゐる、全體としての世界秩序も、またはその中に見出さるゝ凡てのものも」とピロテオスは云つてゐる(斷片一)。自然はこの世界秩序からして把握せらるゝことによつて我々にとつて知られ得るものとなる。さうしてこの世界秩序を象徴するものが即

ち數であるに外ならなかつた、繰返していへば自然を數として把握することはそれを世界秩序に於て存在せしむることであり、さうしてこのことなくして我々は自然を理解すべき通路をもたぬのである。ピロラオスが數なくしては何ものをも認識することができぬと云つたのもこの意味に於ていあつたと思ふ。

ピロラオスに於て數は事物そのものであるよりもむしろ事物を夫によつて把握せしむるあるもの、いはゞ範疇的なるものとなつた。このことはプラトンに於て殊に著しい。例へばプイレボス篇に於てこの意味の範疇的なるものが、有限、無限、混合、理由の四として數へられたことは周知のことであらう。我々は此らの各々が何を意味し、また相互に如何なる關係を有するか等の問題を暫く外に措かう。プラトンも亦有限と無限との範疇的なるものを以て種々なる事物を、プイレボスに於ては主として快樂の問題を取りあげようとした點に注意すれば足るのである。快樂はそれ自らとしては無限定であり、無統一であり、無定形であり、従つて善なるものではない、それに定形を與へ節度をつくり、之を道德的なるものとするのは有限的なる、限定作用であるといはねばならぬ。有限と無限とはこの場合快樂をして徳として成立せしむるか否かを決定するところのものである。事物をそれに於て、またはそれに

よつて定形づけるものを範疇とよぶならば、有限と無限とはまさしくこの意味に於て範疇的なるものであるといはねばならぬであらう。

ところがプラトンはこの無限定的なるものを言表すに主として「より大」と「より小」(μείζον καὶ ἥττω)といふ語を用ひた。それはまた「不定なる二」(ἀόριστος οὐσίς)「不等なるもの」他者「超過するものとさるゝもの」等々としてよばれるが、意味に於ては大體同様であるであらう。ピュタゴラス學徒は有限の外に一つの無限定的なるものを立てたが、プラトンはそれを一つとせず、無限定者を二つのものとして考へたところに著しくピュタゴラス學派から異つた點があるといはれる。何故にプラトンはこの無限定者を不定なる二として規定しようとしたのであるか。無限定者の不定性をさらに著大ならしむるために、かゝる表現をとつたといへばそれまでがあるが、我々はそこに語らるべき何らかの理由を見出し得ぬであらうか。

テイラーはこの點について一つの臆説を提出して次の如く論ずる。(二)
 プラトンが無限定なるものを大小の二つとして規定したのは、特殊なる當時の數學界の情勢によつてある。即ちテオドロス及びテアイテトス等によつて齎らされた無理數の問題がプラトンを刺戟してかゝる表現法をとらしめた。無限定なるものはたゞ輪

廓に於て定形なきものであり、單に量的に一定しないものを意味するが、それを殊に大小の二つの方向に於て表はすのは、單なる無限定者をではなく、數學的に無理數的なるものを表現せんがためであつた。無理數とはより大とより小との二つの方向に於て無限に收斂する二つのシリーズの極限に於て見出さるゝところの或ものとして規定し得られるからである。恰もそれはデデキント切斷に於て見らるゝやうにより大なる數列とより小なる數列との二つによつてのみ定義せられ得るものであるといはねばならない。それはたゞ一つの無限定者によつては、常に之を規定するに二つの無限定的なるものを必要とするのである。この問題を殊に刺戟したものは當時屢々論せられた邊と對角線との不可測性に關するものであつたであらう。プラトンはこの如き幾何的構成からして無理數の成立に理解を深めた。それが無理數であつて有理的でないのは一つの數列の限定的なるものによつては、なく、二つの互にインコンメンシユラブルなる數列によつて規定せらるゝからしてある。無理數の成立にはそれ故に常に二つの無限定的なるものがなければならぬ。プラトンのより大とより小とは恰もこの意味の二つの無限定的なるものを言ひ表してゐるのである。

テイラーは以上の基礎理論からしてさらに其説をおしひろげて一般に數の成立にも及ぼさんとした。先づ最初の數なる一は別として、二はそれが觸れるところの凡ゆる數を二倍する働きをもつところからして、一に次いで二、二について四、さらにそれについて八が生ずる。次に三は、通常考へられる如く二に一を加へることによつてははなく、却て二と四との平均から生ずる。何となれば二は三に對してより小なる數であり、四は三に比してより大なる數であらう。さうしてテイラーによれば凡てこれらの數は大と小との二つからなり立つべきであるから、數三はこの二つの數の平均として規定せられねばならぬ。凡て偶數は二倍化の作用によつて成り立ち、奇數はより大とより小との二つの平均からして得られるといふのが、テイラーの主旨であるやうに見える。例へば六は三の二倍からして、五は四と六との平均からして生ずる等と考へられるのである。

二が一般にもものを二倍にする働き (*διπλασιος*) をもつことはアリストテレスも認むるところであり、大小の二つのものの平均といふ思想も例へば正義の概念に關聯して古代ギリシヤに於ては屢々用ひられた原理であることはテイラーの言ふ如くであるであらう。しかしプラトンの不定なる二が直ちに無理數の基礎づけとして意

識的に考へられたものであるかどうか、より大より小が二つの方向に於て無限に收斂するところの數列として考へられることは一つの解釋としては有意味ではあるであらうが、餘りに近代數學の例へばデデキント的なる無理數の定義をプラトンのそれに投入したものでないかといふ疑を我々はテエブリッツと共に挾まざるを得ない。^(四)無理數の問題がテアイテイトス等によつて當時の數學界の主題とせられてゐたことは事實であらうが、プラトンの不定なる二が直ちにこの問題に答へんがために想定せられたる特殊の思想であつたか否かは事實としては確か得ぬことがらに屬する。テイラーの説によれば自然數の成立は我々の常識とは極めて異つた順序に於て、即ち二、四、八、三、六、五、七、一〇、九の順序に於て考へらるべきであるが果してかくの如き自然的順序を無視したる形態に於て生成したものであらうか。順序數が殊に古代に於ては基數から區別せらるべきことは勿論であるが、さうして數は單に量として、必しも順位に於てははなく考へることが可能であるとしても、自然數が全然順序の意味を無視して成立し得るものであるか否かは疑問として殘されざるを得ぬであらう。ライラーは奇數の成立を平均化の原理に求めてゐるが、アリストテレスによれば、これらの思想家は、プラトン學派の人々は、奇數の生成について原理

はないといつたといふ。^(五)殊に偶數は不定なる二によつて生ずるが、この場合この働
きは奇數のそれとは全く異つた意味に解せられ、平均化として、 $\frac{1}{2}$ 倍化として
働かねばならぬ。テイラーは従つて自然數の成立を一つの原理によつて、 $\frac{1}{2}$ は
説明してゐるのである。不定なる二のかくの如き異つた原理的意味は果して何處
から出て來るのであらうか。

プラトンの「より大」「より小」についてさらに一つの新しき解釋をステンツェルに
於て見出すことができる。彼はその「數と形相」に於て主としてプラトン哲學の根本
的なる立場からしてこの問題を理解しようと試みた。プラトンの立場は、ディアロ
ゴスであり、それはディアイレシス (diairesis) 即ち分割的なるロゴスを意味するも
のでなければならぬ。ロゴスの分割的なるものは、會話に於て二つのものが分たれ
てゐるやうに、または會話とは二人の人の談話であるやうに、分割的なるものを中軸
としてゐるのである。それは即ち分割的であることによつてロゴス的であり得る
ともいへるであらう。プラトンの著述が凡て對話の形式によつて編まれてゐるこ
とも決して偶然ではないであらう。彼はこれをなすことによつて一つの論辯術を
發見したのではなく、それによつてのみ自己の哲學を表現し得たのである。ディア

ローグが彼の表現形式をなしてゐることは、ダイアログスが彼の根本的立場であるからして、あるといはれねばならない。さうして對話が常に二人の間に交はされるものであるやうに、辨證法も二つのもの間に發展するところの論理であつた。分割がその出發點をなし、また常にその中軸に流れてゐることはこの理由からして明かであるであらう。ステンツェルがこの立場からして、プラトンのこの問題を解釋しようとしたのは正當であるといはれねばならぬ。數の成立もまた分割を原理としてゐる。一は二つの數に、即ち奇數と偶數とに分割せられる。さうして最初の奇數と偶數とは一をのぞいては二と三とでなければならぬ。二は更に奇、偶の二つに分たれて四と五とを派生し、三は六と七とを分割的に生成せしめ、以下同様の手續によつて多くの數が生ずるのである。

以上の數の成立についてのステンツェルの説明は、プラトンの哲學的立場を根本原理とするものとして極めて意義深いものであらう。數の順序についてもテイラーのそれに比して自然的であると評せらるべきである。しかしこれによつて我々は種々なる起り得べき疑問からして全く免れ得たものであらうか。分割方法は第一に數を偶數と奇數とに分つことを意味してゐるが、順序的に如何なる奇偶の數が

次々に來るべきかを示しては居ない筈である。一が二と三とに分割せらるべきことは明かであるとしても、二がさらに四と五とに分たるべきか、又は六と七とに配せらるべきかはステンツェルの原理からしてのみでは分明でないといはねばならない。分割法はたゞ凡ての數を二つに分つべきことを示してはゐても、それらが如何なる順序に於て配せらるべきかはこの原理からのみでは分らない筈であらう。次にこの時代の情勢としてギリシヤの數學に於ては十までの數が基本的として考へられてゐた。それは單にそれ以上の數が考へられないといふ理由からしてはなく、十以上の數は十以下の基本數と同一原理から同様にして説明し得られると考へられたからであらう。即ち數の體系は一應は十までの數に於て完成してゐるのである、しかるにステンツェルの學說によれば五は十と十一とに分割せられ、十が體系の完結點を示してゐない、さらに六は十二と十三とに分割せられ、この手續きは無限に至つて止まぬのである。數の系列が無限であることは却て數の本質を形づくつてゐるともいへるが、プリストテレスも明言してゐるやうに、この時代に於ては數の系列は十を以て完結すると考へられてゐたのである。ステンツェルの原理はこのことを如何に解決すべきであるであらうか。

數の成立についての原理が如何にもあれ辨證法がプラトンの根本的立場であつたことは、さうしてそれがステンツェルの主張する如く分割法によつて把握せられねばならぬことは争はれぬ事實であるであらう。しかし辨證法はその分割的性格に於て如何なる構造をもつてゐたであらうか。屢々引用せられるやうに例へばソグリスト二五三dに於ては「諸族に従つて分割すること、及び同の類を他の類とか、他の類を同の類であるとか思はないことが辨證法の知識に屬してゐるのである。」例へば技術が獲得術と製作術とに分たれ、さらに前者が征服術と交換術とに分割せらるゝやうに、或ものはその種族に従つて相互に區分せられ、同じ類は同じ類として、異なる類は異なるものとして明確に分離せらるゝことが辨證法の出發であるのみでなく、その全過程を通じて見出さるゝところの構造であるのである。それは恰も會話に於て問ふ人の族と答へる人の族とが區分せられ、それらが互に混同せられぬことを第一條件とすることと同様でなければならぬ。辨證法が、デアロゴスであることもこの理由に由來するのであらう。數の系列が單に一から連續的に開展するものとして、ははなく、一と二との間に確然たる區別を設け、一と多との對立として把握せられるとき、または存在の秩序がたゞ相對的ではなく、靜止と運動として絶對

に區分せられるとき、さらに事物一般が唯或るものとして、ははなく、存在と非存在として明確に對立せしめらるゝとき、我々は辨證法的なるロゴスに入ることが出来る。この關係は凡ゆる經濟人が富の程度に於て連續するものとして、ははなく、ブルジョアとプロレタリアとの二つの階級に確然として分割せらるゝことによつてマルクスの辨證法に導かれ得ることと同様であるであらう。

辨證法に於て分割が出發をなすことは以上の點からしても明かであるが、それはしかしながら辨證法の全機構を覆ふて之をつくすものであり得るであらうか。我々は上に引用したソブイストの文章につゞいて次の如く讀むことが出来る。「そこでそれをなすことの出来る者は一つのイデアが各々一つづゝ離れてゐる多くのものを通じて到る處に行き互つてゐることを十分に認識し、而して相互に他なる多くのイデアは一つのイデアによつて外から包括せられ、また逆に一つのイデアは多くのイデアの全體を貫いて一つに結びつけて居り、そして多くのイデアは離れゝゝに到る處に分離されてゐるのを充分に認識する。即ち、如何なる程度に個々のものが共關することが出来、または出来ないかを族に従つて區別することを知つてゐる」と。此ことが辨證法にとつてまた極めて重要でなければならぬ。即ち辨證法に於て

は一つのアイデアが多く、アイデアに分割せられることのみでなく、それと同時に分たれたる多くのアイデアがまた一つのアイデアによつて包括せられ、貫通せられてゐることが必要なのである。嚴密にいへばこの二つの働きは根本的には決して別のものではないであらう。分割法は直ちに結合法の一種であるとも見られ、デアロゴスはその反面にシユンロゴスを含むものとも見ることができらう。族に従つて分離すること (*κατ' εἶδος διαίρεσις*) は常に種族の共關 (*κοινωνία τῶν γένων*) を伴ひ、それとこれとは同一の働きの二つの方面にすぎぬといふことができる。しかし分割が一つの方法的意義を以て考へられ、共關が之と區別して述べられる以上、それらが全く同一のものといふことのできぬことも明かであらう。この二つはそれ／＼その働きの方向を異にしてゐる。分割は一つのアイデアが多く、アイデアに分たれる方向を、共關は逆に多くのアイデアが一つのアイデアに結合せられる方向を示してゐるのである。さうして前者が辨證法に於ける、デアロゴス的なものをあらはすとすれば、後者はロゴスの如何なる形態に屬すといふべきであらうか。デアゴロスが上から下への分割であるとするならば、多くの分たれたる事物が、一つのアイデアによつて結合せられることは下から上へのロゴス、即ちアナロゴスであるといはねばなら

ない。それはまさしくロギスのかくの如き構造を示すものであるからである。それはその理由からしてアナロギスと呼べるゝにふさわしきものであるべきことも明かであるであらう。さうして辨證法が單に分割のみからして成立し得ぬことが、または分割は却てその反面に結合を伴ふことによつてのみ可能であること等がこの點からしても論じ得らるゝであらう。しかしこの意味の共關とか結合とかは何を意味すべきであるか。

(一) Jol: Geschichte der antiken Philosophie I. 1921, p. 335.

(二) Taylor: Form and number, A study in Platonic metaphysic. Mind vol. 35, 36.

(三) Aristoteles: Metaphysica. M. XIII 1082a 14.

(四) Toeplitz: Das Verhältnis von Mathematik und Ideenlehre bei Plato. Quellen u Stud. Bd. I. S. 5.

(五) Aristoteles: Metaphysica N. 1091a

(六) Aristoteles: Physica 205b 25 參照。

三

アナロギアの統一とは雑多の中に一なるものを求むることに於て凡ゆる統一作用と軌を一にするが、しかしそれは一なるものを多の外に於てははなく、その中に求める點に於て特色をもつてゐる。それは學の意味に於ても嚴密なる統一性をもつ

てゐるが、それが統一的であるのは多から離れることによつては、却て其の中に横はることによつてある。例へば數學の比例に於て左右の兩項はそれぞれ異つた關係にありながら、この二つの間に同様のロゴスが支配してゐるやうに。アナロゴスとはかくの如きロゴスをたどつてそこに特殊なる統一に到達することを意味するに外ならない。そこには統一の形式が同様なるものに於てよりもむしろ異なるものの中にあらはれてゐる、即ち異なるものの互に異なるそのことがこの統一に於ては前面的なる形態をとつてゐるのである、この統一が分割の反面をなすこともこの理由からして明かであるであらう。それはこれらの多なるものが多なることを止めることによつて一であるのではなく、却て多であることによつて統一を得るのである。しかしかゝることは如何にして可能であらうか。バルメニデース篇百二九にも「一そのものを多であるとし、多をまた同様に一であるとするならば私は全く驚いてしまふであらう」と云はれてゐる。我々はプラトンがブイレーボス篇一五に於てなしたやうに「斯くの如き單一體が眞實に存在するものであると考ふべきか。また第二にそれらの單一體は、それ／＼一であり常に自己同一であり、且つ生成も死滅も許容しないのに拘らず、如何にして、その一なるものが確實に存在するのであら

うか。更に第三にこのものは生成する無数のものの中に分割されて多となつて生ずるとなすべきか、それとも全體として一なるものが自體から離れて多となつて生ずるとなすべきか——然し同じ一つのものが一と多との中に生ずることは分けても不可能のことのやうに見えるであらう」と云はねばならない。一と多とはまことは相反するものとして互に對立してゐる。一が同時に多であり、多が即ち一であるといふことほど背理に見えるものはないであらう。一は即ち多と異つてゐる、一は多と反對してゐる、多は一からして區別せられねばならぬ。しかもかくの如き區別に於て、または分離そのものの中に統一を見出すのが、アナロゴス的な論理であるといはねばならない。それは一つの統一であるが、單なる統一でなくして分離の統一である。この統一が分割をふくむことはそれ自分の本質に根ざしてゐる。それは全體としての一なるものがその自體から離れて多となつたものではない。それは分割された多そのものの統一であるからである。多を離れて一があるのでなく、多そのものの統一として一がそこにあるのである。數の比例的關係が互に異なるもの、異なる限りに於て一であるやうに、アナロゴスに於ては一は他と全く分離しながら、分離そのものの中に統一を有するのである。それはヘテロゲネアスの中にお

ける同質者ともいはるべきであらう。互に異れる個物を拂拭することなくして統一を構成するところにアナロギアの統一は求めらるべきである。

プラトンに於ける大小または不定なる二がテイラーの主張する如く無理數の表現態であるか、ステンツェルの論ずるやうにデアレーシスの構想に基くかは問題であるが、これらを通じて明かなことはプラトンがそれによつて何等かの關係的なものをそこに表現しようとしてゐることである。大と小とは不定なるもの、無限定的なるものであるところからしてそれはより大、より小として考へられねばならぬであらう。しかし大は必ず小に、小は常に大なるものに對して意義をもつてゐる。それは互に關係的であることによつて一つの規定をあらはすものとなるのである。プラトンが無限者を大と小との二つに分つたことについてアリストテレスは次の如く語つてゐる。^(一)プラトンはこの理由からして、二つの無限なるものを、即ち凡ての増大をこえて超過するものと、凡ゆる減小をおしすゝめて無限に到るものを作つた。しかし彼はかゝる無限を假定はしたが實際には用ひなかつた。何となれば數に於て彼は無限なる減小を認めなかつたし(モナトは最小のものであるから)限りなき増大をも許さなかつたから數の系列は十まで^(二)あるからと。アリストテレス

のこの所傳によればプラトンは無限定的なるものを二つの方向に於て考へたことは確かであるが、テイラーのいふやうにそれを直ちに無理數の規定として考へ得ないことはこの點からしても明かであるであらう。より大とより小とは必しも無限に收斂する二の數の系列としては考へられてゐない。それはむしろ唯この二つの關係によつて規定せらるゝところの或ものを表はしてゐるにすぎぬ。それはおそらくテエブリツツ等の主張するやうに數學的比の認識論的化身としてのアナロギア思想に基くものといふべきであらう。數學的比には二種が區別せられ、連續的なもの (*ἡ ἀναλογία συνεχής*) 例へば $2:4::4:8$ と分離的なアナロギア (*ἡ ἀναλογία διασπυμένη*) 例へば $1:2::3:4$ との二つがあるであらう。前者に於ては中間項が一つであつて關係が緊密であるが、後者に於ては異なる中間項によつて結びつけられ、關係はやゝ疎隔されてゐる。關係的なものは緊密を常態とするが、アナロギアに於ては却て後者の場合その面目を發揮するのである。何となれば前にも述べたやうにアナロギアとはそもく分離的なものの統一であるべきであるから、かくの如き數學的比は認識論的に或は二倍のものの半分に對する關係として、一般に等しきものの相等性を、さらには等しからざるものの不等性を、さらに一般的には數が數に對し、尺度

が尺度に對して立ち得る凡てのものの關係即ち對比として考へられるのである。これらは凡て限定の種族として明かに認識論的なるものに屬するであらう。テツブリッツの考へたやうに一般に比の概念がプラトンの晩年の對話篇に於て彼によつて潜心せられた問題であるとするならば大と小との無限定者はこの觀點からしてやゝ正鵠に近き解釋を得ることができらるであらう。

プラトンに於てイデア數とは何であつたか、この問題もこゝに附說的に論せらるべく餘に大なる問題ではあるが、ステイツェルが明説したやうに、^(三)イデアとしての數は統一的なるものを辨證法的にその位置價值に従つて體系の中に於て區別するところの秩序原理 (Ordnungsprincip) であるといふべきであらう。プラトンに於てイデア數が數學的數と區別して考へられてゐなかつたかどうかの問題は外に措かう。プラトンの直接の弟子達例へばスペウシッポスやクセノクラテスに於てこの説が明述せられてゐないといふ點からして、それが果してプラトンの學說であつたか否かを疑ふことも暫くさしひかへよう。

イデア數とは極めて曖昧なる名稱であつてそれはイデアとしての數であるか、數としてのイデアであるか、またはイデアそのものの數であるかも的確には定めがた

いのであるが「感覺的なるものと形相との外に數學的なるものがあつて兩者の中間を占めるとプラトンはいふ」といふアリストテレスの所傳(三)によれば、イデア數は單なる形相ではなく、この中間的なる數に結びついたものでなければならぬことは明かであらう。しかしイデアが數に結びつくことによつて何かそこに齎されるのであるか。

イデアが數であることによつてそこに齎されるものは、それが一であつて同時に多であるごとき存在である。なせなら一であつて同時に多であることの可能性は數としてのみ實現せられ得るからである。かくの如き解釋はツェラー以來殆んど常識的となつて多くの人々によつて施されたものであつた。しかし數に於て一と多とは如何に統一せられてあるか、一にして同時に多であることはイデアのシステムに於て如何なる意味を有するのであるか。イデアが數として現はれるのはそれが一であつて同時に多であることの可能性をもつことであるが、一と多とは「人間のロゴス自身に屬する不死にして老ゆることなき一つの屬性である」(四)。それを我々に意識せしむるものは即ちロゴス自らであるに外ならない。これについて關心することはロゴスそのものをして我々の中に働かしめることである。數に於るロゴス

は即ち比であつた。比例的なるロゴスは常に多の中に一をさし示してゐる。一そのものを多であるとなし、多を同時に一であることと云ふことは驚くべきことであるが、「ひとが凡てのものは一を分有することによつて一であり、また多を分有することによつて多であると言つても私は驚かない」とプラトン(五)は云ふ。一は一を分有することによつて、多は多を分有することによつて一であり、多であると共に、一は多を、多は一を分有することによつてまた一つのロゴスが成立つ。アナロゴスとは此の如き分有の論理をいひ表すものに外ならない。分有とは即ち一であつて同時に多であることの存在の様式をあらはしてゐるからである。こゝに於て我々は例へば次の如き區別をそれについて設ける必要に迫られるであらう。或ものがアイデアを分有することはその一つであるが、アイデアとアイデアとが互に如何なる關係に於てあるかを問ふことがその二である。凡てのものが一を分有することによつて一であることは前者の例であるが、一と多とが互に分有することによつて存在を形づくることは後者の場合に屬するであらう。アナロギアはこの二つの場合を通じて働くが、アイデアが秩序原理として考へられるのは就中後者の場合に於てであるといはねばならない。アイデアとアイデアとは互に如何なる關係に於て立つてゐるであらうか。

かく問ふことは多くのイデアが互に無關係のものとしてゝはなく、それらが一つのシステムを形づくつてゐることを言ひ表してゐる。さうしてこのシステムの中にあつて各々のイデアが如何なる位置價值をもつてゐるかを決定するものが即ちイデア數に外ならない。イデアが數としてあらはれるのは其れ故にそれがイデアの全體系の中に於て一定の位置を占めることである。恰も數の體系に於て各々の數の占むる位置が一定してゐるやうに、イデアはそれの體系に於て一定の位置價值を擔つてゐる。このことなしにはイデアは徒らに分たれたる多くのアトムでしかあり得ぬであらう。プラトンのイデア論をしてデモクリトスのアトミズムから區別せしむるものはこのイデアを貫いて一つの體系を形づくり、各々のイデアをこの體系の中に於て定置せしむるところのロゴスであるに外ならなかつた。さうしてこのことを可能ならしむるものはイデアが單にイデアとしてゝはなく數として存在することによつてゝあるといはねばならない。善のイデアを最上としてアトモン、エイドスを最下位にもつところの全體が所謂イデアの體系を形作つてゐるであらう。この體系の中にあつてそれぞれのイデアを位置づけるものはイデア數の働きによるのである。

すべてこれらの意味に於て相互に關係づけるものは數の比例的性質であり、認識論的にはアナロゴス的な論理であるといはねばならぬ。多なる感覺的事物が一なるイデアを分有することも、それぞれのイデアが體系の中にあつて一定の位置を占めることもこのロゴスの働きによると考へられねばならない。さうしてそれらは凡て分たれたる多くのものからして一に溯るところのアナロゴス的なものに屬してゐるといへぬであらうか。

嚴密にいへばアナロゴスとは單に多から一に溯るところの方向的なるものをのみでなく、むしろ多の中に統一をつくるところの綜合的なロゴスを意味してゐる。それはそれによつてロゴスそのものの本質的な働きを可能にするのである。ロゴスとは即ちこの意味に於て存在の内面的秩序を構成するものに外ならなかつた。Przywara の近著 *Analogia entis* に於て *una* と *duo* とを區別して後者は副詞として單に上の方向を示すにすぎないが、アナとはむしろ事物の内面的なる秩序に於て (*in innerlicher Ordnung*) あることを意味してゐると考へた同書一〇〇頁。多からして一に溯ることはそれ故に、多の中にあつて内面的秩序を齎すことに外ならぬであらう。多くの分たれたるものが、唯分たれることによつてではなく、却て秩序に於て配置され

てあることによつて分離性を保つことは殊に辨證法に於て肝要であるといはねばならぬ。辨證法がデアレーシスであることもかくの如きアナロゴスを土臺とするることによつて初めて可能なのである。プラトんに於て單に一から多に分たれる下降的論理のみがではなく、同時に多から一に歸るところの上昇的原理が顧らるべきこともこの點からしてさらに明かならしむることができるであらう。

ジャネーがそれとは別の意味に於てではあるが、プラトンの辨證法に二つの種類を、即ち *dialectique descendente* と *dialectique ascendente* とを區別しながら、同時にこれらの二つが常に *mêles* し、互に相補ふべきであることを主張したのも正當であるであらう。我々の言葉でいへば前者は分割的辨證法であり、後者はアナロゴス的な辨證法である。否むしろこの區別は辨證法の單に異なるロゴスの側面であるとかいへぬものであらう。たゞ我々がこれらを茲に區別するのはプラトンの辨證法に於ても單にステンツェルの力説するやうに分離的なるロゴスが主なる役割を演じてゐるのではなく、却てアナロゴス的な統一作用がより根柢的であることを擧揚せんが爲であつた。アナロギア思想のプラトんに於ける位置は此點からして評價せらるべきであると思ふ。

アナロギア思想をとりだしてプラトンを上の如く論ずるのは、特に彼の後期の思想を偏重する所以であつて、プラトンの全體に行き亘つた論說でないといふ非難を茲に我々は待ち設ければならぬかもしれない。しかしプラトンの初期または中期の思想に於ても、アナムネーシスの思想が重要な位置を占めてゐたことは多くの人々の認むるところであらう。しかもこのアナムネーシスがそのアナ的性格からして如何にアナロギア思想と密接なる關係を有つてゐるかを洞察し得た人は何程あるであらうか。

最後にアナロギア思想がアリステレスの哲學に於て如何なる位置を占めてゐたかを示唆するに止めたく思ふ。プラトンの辨證法がディアロゴスであるとするならばアリステレスの立場はシュンロゴスでなければならぬことは既に記された。しかしディアロゴスがシュンロゴスにまで發展したのは如何なる理由によつてあるか。かく問ふことはプラトンからアリステレスへの發展を我々に理由づけるものであるが、我々はこゝにこれらの點について詳しく理路を辿る暇なきことを歎かねばならない。粗雑なる叙述によればディアロゴス的な辨證法は二つを分割することに急であつて、これらを結合することに於て疎かである。殊に辨證法に於て中心的なる媒介の概念はプラトンに於て殆んど無力であつたといはねばならぬであらう。トピカはアリステレスの著書の名であるが *topica* はひろく一般に話題的なるものを意味する。さうしてディアローグに於て話題が中心をなすや

うにダイアレクツスに於ては問題が中軸をなしてゐる。しかし辨證法が問題を出發とし、のみならずその終極とする以上凡てが問題的であり、たかゞ試論的たるを免れない。

アリストテレスのシュロギスムはむしろロゴスの綜合的なるものを、または二つのものの媒介者を中心としてゐる。シュロギスムは二つのロゴスによつてはななく三つのロゴスによつて成立してゐることも單に數の上の問題ではないであらう。中間的なるものが二者の媒體として特殊なる位置を占むるところにシュロギスムの意味が横はつてゐるのである。小前提とはこの理由からして二つのロゴスを、または一般者と特殊物との結合をそれによつて媒介するものに外ならなかつた。

ヘーゲルの辨證法は媒體なき媒介として有名であるが、そこにテーシスとアンテーシスとを結合するものは何であつたであらうか。ヘーゲルに於ても *Vermittlung* の問題が辨證法の中軸をなしてゐたことは争はれぬ事實であらう。アリストテレスにとつて媒體をなすものはむしろ存在の或ものであつた。小前提に置かれたる事物は具體的なる存在そのものであり、一般と特殊とはこの具體的存在に於て密接なる結合をあらはす。論證の確定性 (*Apodiktisch*) は小前提に於てこの二者

がそれ自らをあらはにするところに (*amodiskrypsi*) あるといはねばならない。アリストテレスがダイアロゴスの代りにトリロゴスを用いたのも、一つの判断の場所に三つの判断を重ねることによつて一般に根據づけられたるロゴスを明にしようとしたのであらう。Noyon Sôbouuといふことがプラトンに於ても常に學問の任務として考へられてゐたが、この任務を十分に果すことがアリストテレスの目的であつたであらう。シュロギスムに於て中心的位置を占むるものは媒體であるがそれに論據を與へるものは一般的なる大前提であるといはねばならぬ。さうしてこの一般者が個體との結合を、小前提に於て實現することはこれを媒介として二つのロゴスが綜合せられることを意味するのである。さうしてロゴスが中間的媒體を有することは即ちアナロゴス的なる結合であるといはねばならない。何となれば二つのものはこの中間者によつて媒介せられ一つの調合的統一を形づくるからである。

シュロギスムの結論は決定せられたる斷定であるが、判断に於て中心なる結語はまた一つのロゴス的なるものを、アリストテレスに於ては殊にアナロゴス的なるものをあらはしてゐる。ホフマンが指摘したやうに各々異りたる個物を具體性に於て形づくるものは單にその本體といふ如きものでなくして、却て一つのアナロギ

アでなければならぬ。メタピイシカH篇一〇四二に記されたるこの文章を多くの人々はそれが本體ではなく、たゞ本體に類似のものの意味にとつてゐるが、*ἐπιεικῶς* は各々に於ける本體に似たものではなく、それぞれの事物に於けるアナロゴンそのものでなければならぬ。それは音楽に於ては音の調和であり、書かれたる言葉に於ては文章のシユンタクスであり、考へられたる語に於ては概念または判断の統一であるべきであつた。AがBであるといふ判断はAとBとがかくかくの具體的なる關係の中にあることを意味してゐる。Aがあるといふのはそれがそれぞれの具體的なる位置に於てまたは情況に於て存在することを意味するのである。それ故にアリストテレスはさらに後に續けて云ふ(且一〇四八)「我々は單に凡ての事物の定義を求めぬのみではなく、そのアナロゴンを見なければならぬ」と。ロツスはこの文章を誤つて「我々は凡ての事物の定義を求めてはならない、たゞそのアナロギアをつかむことに満足しなければならぬ」と譯してゐるが、アナロギアは定義に比して劣等なものではなく却てその逆である。殊にこれを見ることは單なる *ὁμοιωμα* でなくして *συνομοια* であるといふのは何を意味するであらうか。

この論文は昭和八年十二月京都哲學會に於て私の試みた講演の草稿である。それが公開的であつた、め個々の問題について

學問的に精しく論ずることが出来ず、たゞ一般的な筋書の如きものとなつたことを遺憾とする。殊にアリテトレスについては尤もに精細なる論述が別に要求せらるべきであらう。

- (一) Aristoteles : *Physica* 206^b
- (二) Stenzel : *Zahl und Gestalt*, S. 117.
- (三) Aristoteles : *Metaphisica* 987^b 14.
- (四) Platon : *Philebos* 15^d.
- (五) Platon : *Parmenides* 129.
- (六) P. Janet : *Essai sur la dialectique de Platon* 1818 p. 110.
- (七) Hoffmann : *Die Sprache und die archaische Logik*, S. 68.